

標茶と太平洋戦争

～軍村標茶と軍馬補充部の光と闇～

戦後70年を迎え、各地で太平洋戦争について振り返る活動や報道が行われています。本町は日本陸軍の外郭団体である軍馬補充部川上支部のお膝元であり、太平洋戦争末期には道東防衛部隊の駐屯地が置かれ、空襲にも晒された軍と戦争に関わりの深い町でした。

本展示では軍馬補充部川上支部と標茶空襲を中心に、当時の標茶を紹介します。

展示日程 (見学無料)

- 9月14日(月)～25日(金) 開発センター
- 9月25日(金)～10月2日(金) 磯分内酪農センター
- 10月2日(金)～9日(金) 虹別酪農センター
- 10月9日(金)～16日(金) 沼幌小学校
- 10月20日(火)～28日(水) 図書館



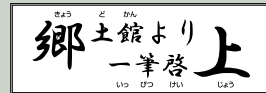
※各会場とも初日は午後から、最終日は午前までの展示となります。11月以降の日程は別途お知らせします。

皇族による軍馬補充部川上支部視察

大川のほとり

—郷土館だより(第67号)—
☎487-2332

開館時間
午前9時30分～午後4時30分



戦後70年の節目の年ということもあり、報道各社から軍馬補充部についての取材が相次ぎました。

標茶にとって軍馬補充部とは何だったのか、私自身も改めて考える良い機会となりました。(坪)



釧路集治監人物伝 最終話 中編 3

釧路集治監看守長 愛の典獄 有馬 四郎助

(前回のあらすじ) 有馬四郎助は文久4年(1864年) 鹿児島県鹿児島市下荒田町にて益満喜藤太の四男として生まれ、士族である有馬平八の養子となり有馬姓を名乗りました。明治19年より釧路集治監の看守長として3年間を標茶で過ごしました。典獄大井上輝前や教誨師原胤昭に出会い、大きな影響を受けた後、空知集治監へ異動しました。

空知集治監は明治15年、現・三笠市に開庁した道内2番目の集治監でした。その主な役割は囚人による幌内炭鉱の採掘でしたが、人命軽視の危険極まりない作業が常時続けられており、出役した囚人8000～12000人のうち、常時2割は病気や負傷で外されていました。必然的に獄内状況は殺伐とし、囚人の逃走などが多く起こりました。明治22年に第2課長として着任した四郎助は、日々囚人たちと接しながら、業務を指揮しました。当時の四郎助は、エネルギー溢れる極めて鼻息の荒い役人と評されており、厳しく恐ろしい刑務官でした。釧路集治監で大井上典獄から教えられ



空知集治監典獄官舎のレンガ煙突

空知集治監の建造物はほぼ全て取り壊され、現在ではこの官舎煙突しか残されていません。

た人道主義的な監獄のあり方や囚人との接し方とは異なることから、大井上の考えを理解しながらも、全面的に賛同していなかったことがうかがえます。また北海道集治監では、全体の統制と規律を正すため、四郎助のような厳しい刑務官が理想とされていました。明治24年5月、四郎助は空知集治監のキリスト教系教誨師として赴任した、留岡幸助に出会いまし

塘路に白い羽のカラス現る!!

カササギ? それともオオワシ? 実はこの鳥、塘路の街中で見られる遺伝子異常のハシボソガラスなんです。皆さんは、カラスというと身近な鳥であると同時に、人に迷惑をかける困った鳥、真っ黒で死肉をあさる不気味な鳥という、不吉なイメージをお持ちではないでしょうか?

さて、そんな悪い印象のカラスですが、昔の人にとっては、意外にも太陽の使いや神の使いといった神聖なイメージで語られることが多かったそうです。例えば、日本サッカー協会のシンボルマークとして3本足のカラスである「八咫鳥(やたがらす)」が使われていますし、長野県には「烏踊り」といわれる民謡と踊りが伝承されています。また、山岳信仰に起源を持つ修験道では「カラスは神の使い」として、長く崇められてきました。

そもそもは、中国の3本足のカラスが太陽の黒点に住んでいるという伝承が日本に伝わって、カラス信仰が生まれたともいわれていますので、広く東アジア圏にカラス信仰が根付いていたとも考えられますね。時が進むにつれて生活スタイルや農作業の方法が変わったため、カラスの害のみがイメージされるようになったのではないのでしょうか。白いカラスを見たら良いことがあるという言い伝えもありますので、ぜひ皆さんも塘路の白いカラスを見てみてください。カラスの悪いイメージが変わるかもしれませんよ。



←白い羽根の
ハシボソガラス

羽を
閉じている時の姿



た。留岡は神学の中で「人間社会には遊郭と監獄という2つの暗黒がある」と学び、福音の光がこの2つに光を注ぐことができると信じて教誨師の道に進んだ人物でした。多くの囚人を前に話したり、毎朝5時に各監房で少人数に向けて話したりするほか、休日返上で熱心に教誨活動を行いました。ここで行った教誨活動は、人の道について教える道徳教育の一種でした。留岡の熱心な教誨に四郎助も影響を受け、キリスト教についての自身の偏見を見直す機会となりました。四郎助が新設された北海道集治監網走分監の初代分監長として赴任する事になったため、2人の出会いはごく短期間に終わります。しかしこの縁は、後の四郎助に大きな影響を与えました。

網走分監は「中央道路」と呼ばれる札幌〜旭川〜網走間道路を開削するために、釧路分監が管理する仮設の監獄出張所を、発展拡充させて設置されました。着任早々から囚人たちを使った大道路開削事業の責任者として指揮を執ることになった四郎助は、当時、北海道集治監の総責任者となっていたかつての上司、大井上輝前に次のような手紙を書いています。

「この監獄設置の主旨は、
一に囚人にて不毛の地を開いて国益を増進すること、
一に中央道路の難関に当たり、これを開削するために囚人を使うことは、一般の人々に任せて開削するよりは少ない費用にもかかわらず堅ろうな道路を作ることができ、これにより旅行者や物資運搬は便利になること。
(網走監獄の設置は) 将来この地方を栄えさせる意図があると考えます。」

しかし一方で中央道路建設は、本道の囚人による道路開削の中で、最も悲惨を極めた工事でした。わずか3カ月の間に2000人近い囚人が病気になる、うち1割が死亡しました。死亡した囚人は鎖をつけられたまま道路脇に埋められたと伝えられ、今日までに多くの囚人の遺骨が発見されています。中央道路は、ロシアが北海道へ攻め込んできた際の軍用道路としての活用も視野に入れた道路でした。現場の状況がどうあれ、四郎助は厳しい工期日程を課せられる中で奮闘したのです。

(続く)



北見付近の中央道路
小池喜孝著『鎖塚』より引用